

1

「新しい人」に向かって 人類の共生の地平

小林康夫

UTCP

はじめに

台湾大学のみなさま、とりわけ哲学系教室のみなさま、佐藤将之先生、みなさまのお招きによって、今回はじめて台湾を訪れる機会を得ました。いっしょにまいりました UTCP のメンバー、あるいは共同研究員とともに、このような機会を与えてくださいましたみなさまにまずは、あつく御礼申し上げます。

われわれ UTCP は、文部科学省のいわゆる 21 世紀 COE そしてそれに続くグローバル COE という競争的な資金を得て、東京大学大学院総合文化研究科に 7 年前より設置されている哲学を軸とした人文科学の研究と教育の国際的な交流のためのセンターです。このセンターは、文部科学省に提出したプログラムに「共生のための国際哲学」をうたっておりまして、「共生」という理念を、活動のひとつの中心的な標識としています。これは、あくまでも理念である、ということは、これがわれわれの研究という作業のなかでも具体的な機能を担った概念であるというよりは、むしろありうべき作業の地平を指し示すものであると言えます。すなわち、グローバリゼーションと呼ばれるこの歴史的な時代が、哲学的な思考に、さらには広

く人文科学の研究に要求していることとは、なによりも「共生の地平」を開くことだと受けとめることで、われわれの活動にひとつの方向性を与えようというわけです。

これは、ただちに、確固とした「共生哲学」なるものがあるわけではない、ということの意味します。「共生哲学」とそうでない哲学があるのではなく、現代における哲学の作業、思考の作業が、直接的にしる間接的にしろ、「共生の地平」を開く方向へとなされなければならない、という努力の方向付けこそが問題なのです。ですから、今回、この国際学術研討会の開幕にあたってわたしがなすべきこの言説のタイトルが「作為実践的共生哲学」と名付けられているのを見出したとき（これはわたしの提案ではなく、おそらく佐藤先生の発案なのだと思います）、わたしとしては少々たじろぐところがなかったわけではありません。しかし、それでもなお、わたしとしては、これを修正して新たな題を提案し直すよりは、あえてこれを引き受けることで、わたしが「共生の地平」という問題設定に対して、——これまでの UTCP での 7 年間の経験を踏まえて——、いま、どのような「態度」をとろうとしているのかを、たとえば大雑把な形であっても、提示するべきではないか、と思いました。きわめてささやかな身振りですが、このシンポジウムという他者の場の求めに応答を試みることこそ、まずは「共生」に向かっての小さな実践でもあるのですから。

1. 歴史の転回

われわれは歴史のなかに存在しています。ついに「ひとつの歴史」のなかに存在しています。これは驚くべきことです。

クロード・レヴィ=ストロースが「冷たい社会」と「熱い社会」を区別したのは、ほんの数十年前のことです。熱力学的な「歴史」のダイナミズムに貫かれた「熱い」文明社会、そして神話的な反復が支配するいわゆる「未開」の野生の社会。だが、いまやもはや後者は存在していません。戦争と闘争とが支配する数十年前の世界——その残酷なまでに「熱かった」

時代には、それでもまだ、そのダイナミズムから取り残された島のように、起源を儀礼的に反復する時間のなかで世界のなかにみずからの存在を織り込むように没入しつつ存在していた人々がいました。人類学は、まさに「人類」という名において、これらの人々の社会に問いかけ、そこから「熱い社会」がとうに忘却してしまっているが、しかしわれわれが共通にそれであった世界（自然）のなかでの存在の——ひょっとしたら「秘密の」——仕方をもう一度、学び直そうとしたのです。それは、「熱い社会」が「冷たい社会」を征服し、飲み込み、完全に圧倒してしまう直前の最後の段階における滅びていく存在形式の——愛惜なしにではない——認識、記述、記録、つまりは「歴史化」の試みでもありました。つまりそれは、決定的に失われていくみずからの遠い過去に、それを記憶するための最後の一瞥を投げかけることでした。そしてその記憶化の試みとほぼ同時に、われわれはついに、まだ「歴史」に浸食されていない、林間地のように空いたそうした社会をほぼ完全に失ったのです。

もはや「裸の人間」は存在しません。もしそのように見えるものがあるとすれば、それは観光あるいはそれ以外の商業のために、「残っているもの」として保存され、管理され、閉じ込められたものにすぎません。「裸の人間」はすでに商業あるいはテクノロジーの「衣装」をまとい、それにまもられながら保存されているだけなのです。もちろん、それは、そのような存在の形式がただ忽然と消滅してしまったということではありません。現実としては消えてしまっているが、しかし同時に、個人を超えた集団的な記憶、イメージ、さらにはファンタジーとして、内在化され、残存しているとも言えるのです（映画、アニメ、漫画、小説等々におけるファンタジーの興隆はそのこととけっして無関係ではないはず）。

こうして、いまや、人類はひとつの歴史のなかに存在しています。地球というこの惑星の上に人類というひとつの種（ホモサピエンス）が単に自然的な存在としてではなく、歴史的な存在として——「世界内存在」という言葉に対して「歴史内存在」と言ってみたくになりますが——存在しているのです。もはや地球上の何ものもこの歴史から免れることはできません。どのような人も、どのような物質も、おそらく生物はもとより無機質な空

気や水に至るまで、人類という種がみずからの存在の展開を通してつくりあげてきたこの「ひとつの歴史」のなかに存在しているのです。

こうしてグローバリゼーションと呼ばれる、現在のわれわれが直面している「事態」（「状況」ではなく）は、この「ひとつの歴史」の完成を意味するとも言えるでしょう。さまざまな歴史のダイナミズムが、究極的に、地球という惑星、その「大地」の限界に到達することで、逆に「ひとつの歴史」としてみずからを自覚せざるをえない「事態」で、それはあるのです。いつか遠い将来に、人類がこの天文学的な限界そのものを打ち破って、宇宙空間に飛びだし、そこからまったく新しい「歴史」をはじめられることもあるかもしれませんし、こうしたサイエンス・フィクション的なファンタジーはまさに「ひとつの歴史」の効果のひとつなのですが、いまここではこの遠い「運命」のことは問題にしません。とすれば、限界や境界を内側から外へと破ることによって、つまりは拡張的に、侵略的に、越境的に運動するダイナミズムが、とりあえずのこととしては超えることが不可能な限界にぶちあたることによって、なんらかの「折り返し」を迫られている、あらゆる次元において「転回」を迫られているという「事態」であるわけです。歴史の危機的な転回点にわれわれは立っている、ということです。

2. どんな主体？

では、この「ひとつの歴史」の主体は何なのか？ もちろん、これこれの民族でも国家でも階級でもありません。そこで問題になっているのは、そのような個別的な歴史の主体の彼方にあるような人類というその全体性です。だが、それは同時にこれまで、人類とはこれまで所与ないしは条件であって、けっして主体を保証するものではなかったということでもあります。いまだ歴史に巻き込まれていない「冷たい社会」においてならば、人間は人類として、他のさまざまな動物植物の種とならぶひとつの種として定義されていたのかもしれないのですが、歴史のダイナミズムの主体と

して要請されるのは、あくまでも歴史への意志を備えた、ということは自己の時間的な内在性を備えた「人間」であったのです。

ここで小さな括弧を開いておくとするなら、ミッシェル・フーコーが論じたように、西欧の古典主義時代において「人間の誕生」が起こったとするならば、その「人間」とはなによりも内在性に貫かれた存在であり、その普遍的な内在性こそが「世界の認識」と「歴史への意志」を通して主体的な支配を可能にしていたのです。ついでに言うならば、この歴史的な光景の全体は徹底して「哲学的な」ものです。哲学は、西欧において、このような「歴史の誕生」に決定的な役割を果たしているのです。哲学は無傷ではない。あるいは哲学の重大な「罪」とまでは言わないにしても、「責任」というものがあるのかもしれないのです。一方ではそれを歴史的な「必然」として受け止め、しかし同時に、それに超歴史的な「問い」を差し出さないわけにはいかない——それこそ、人類の歴史という視座がもたらすひとつの効果かもしれません。

つまり哲学は——ということは、それと連帯して発展してきた人間科学の思考は、まさにこのような「歴史」の主体としての「人間」という理念そのものに対して、いまや、それを問い直すべき「責任」があるとなわしは考えるのです。いやむしろ、哲学はこれまでも、実は、つねにそのような「責任」を担おうとしてきたと言うべきかもしれません。「人間」が内在性に基礎づけられており、また哲学そして思考こそが純粋な内在性として「人間」の根拠であるのだとするなら、もし「転回」が起こるのなら、それはまず「哲学」において起こるべきかもしれません。とすれば、哲学は、内在性という根拠そのものにおいて、「人間」という理念が「転回」する出来事をこそ呼ぼうとしたのだし、そうするのではないか。そしてまたこの「人間」の問い直しという人類的な問題設定においてこそ、西欧哲学の「人間」とは異なった文脈において、つまりかならずしも内在性に還元できない仕方でも「人」という存在形式を構想し、そこからもうひとつ別の「世界」と「歴史」を考えようとしてきたわれわれ東アジアの思考がもたらすことができるのかもしれない貢献の可能性があるのではないかとわたしは思うのです。

とはいえ、ここでは、わたしはこの「人」による「人間」の脱構築という方向にはわたしの思考を進めることはしません。そうではなくて、あくまでも「人類」というこのあまりにも外在的な言葉にとどまることにしたいと思います。すなわち、わたしのここでの思考の「転回」はとりあえずのこととしては、「人間」から「人類」へと向かう方向に踏み出そうとするわけです。

というのも、「人類」という概念こそ、われわれの存在を、過去そして現在の地球上の他のすべての生物種の存在と同じ資格、同じ形式（たとえば遺伝子）で規定するものであり、われわれが地球上で何億年かの進化を遂げた「生命」のひとつの末裔であることを言うものであるからです。もしかつての（西欧文脈における）「人間」の規定が何よりも「（一神教的な）神」との関係（絶対という無・関係の関係）において成立しており、その意味で「神」が「人間」にとっての絶対的な「限界」であったとするならば、その「神」も「死んだ」と言われて久しいいま、「人間」にとっての「限界」は、「人間自身」でもある「人類」なのではないか、というわけです。

実際、「人類」という概念は、「人間」の「歴史」を、それよりももっとずっと大きな、何十億年にも及ぶ「生命」の「超歴史」のなかに組み入れてしまいます。われわれは「人間」という内在性の原理によってはそのような認識には到達することがけっしてできないにもかかわらず、現代生物学の外在的な実証性に従えば、原生細胞から出発して分化と進化を遂げてきた「生命の歴史」の一部であるのです。すなわち、われわれはすでにわれわれの生物学的な存在の形式において、すでに「共生」的に存在しています。しかも、この場合、「共生」という言葉は、単に、「人間」のあいだの「共生」を意味するだけでなく、人間とその他の生物の種とのあいだの原理的な「共生」までを指し示しているのです。いや、最近の生物進化論の研究が明らかにしたように、ミトコンドリアが外部から取り込まれて細胞内に「共生」することこそが、われわれの生命の原型でもあったのです。ここには（「精神」のではなく）「存在のエコロジー（生態学）」とでも呼ぶべき新たな地平が開かれています。「人間」の思考はいま、このエ

コロジーを「内在化」するようにながされているのです。

だが、同時に、われわれ「人類」はすでに、そのような「生命の歴史」のなかのひとつの種であることから、完全に離陸してしまっているのでもあります。すなわち、「人類」は与えられた生態系のなかに「住む」のではなく、その生態系そのものを、みずからの意志によって、変容させることによって「住む」ようになりました。みずからの生存の利益に応じて、生態系を開墾し、開拓し、開発し……、そのようにしてみずからの存在の形式を新たに「開く」。この「開け」は言うまでもなく、未来の時間への「開け」、支配する意志としての「開け」ということになります。「人類」はみずからの存在の条件と形式そのものを問い、作り直し、鑄直す。つまりは技術的に、かつ言語的に、そして権力的に、世界を支配し、改変する。われわれは、そのようなものとして世界のなかに存在していたのです。

しかし、この技術＝権力は、近代において、世界のなかの「もの」だけではなく、物質にまで手をつけるようになります。すなわち、巨大な規模での「錬金術」が起こる、と言ってもいいかもしれませんが、物質のなかに閉じ込められていたエネルギーが解放され、それが「人類」の生存の条件を根本的に変えてしまいます。技術が「手」の延長であることを超えて、テクノロジーというシステムとなる。身体の延長ではない技術、「人間」の本来的な「力」を——指数関数的にすら——圧倒的に超出した「力」（エネルギー）がわれわれの生態系を支えるようになります。あるいはそれを「都市」と言ってもいいかもしれません。われわれは「都市」という奇妙に人工的な、異常な、ほとんど怪物的な生態系を展開させるに至ったのです。

一言で言うなら「都市」は「大地」なき生態系です。「都市」の生態は、それを支える生存の基盤から完全に切り離されています。ひとたび大停電が起これば「都市」の機能は完全に麻痺するのに、しかし「都市」の住民の誰も、みずからが消費する電力が、遠隔にあるどんな生態系に依存しているか、あるいは原子力という危険な「錬金術」に依存しているかを考えることも、想像することもできません。それは無数の複合的なネットワークのシステムです。そこではすべては単なる「実体」ではなく、「関係」

において、しかも集積的な「関係」において存在しています。関係操作のその集積は、ちょうどわれわれの身体における脳のようなものです。われわれの科学はちょうどいま、ようやくわれわれの内在性の器官そのものである脳を外在的に研究することができるようになってきています。科学は、「人類」がどのように「脳」として、ということは同時に、無数の物質（神経伝達物質、快楽物質、抑制物質、などなど）の関係操作の集積によって、「機能」しているのかを明らかにしはじめているのです。あるいは、逆に言うなら、「人類」はいまようやく、みずからの「内在性」の器官である「脳」を「都市」として外化し、実現したのだと言ってもいいかもしれません。「都市」とはわれわれの「脳」が生み出した集積的な「共生」の生態系なのです。

「人類」はいま、都市＝脳であるような存在形式において存在しています。しかし、この複合的な複雑な、しかし相対的に独立した組織体には絶対的な主体の「座」はないのです。デカルトが期待したようには松果腺は自我の「座」ではなかった。それと同じように、海馬にも脳室にも前頭葉にもわれわれは自我という主体を見つけることはできないでしょう。同様に、都市もまた、そこには証券取引所があり、いくつもの役所があり、大統領府とか首相官邸があり、警察に軍隊の駐屯地までもがあり、市場があり、アーケードもデパートもあり、学校、工場、消防署、会社、企業、レストラン、駅、空港、港、博物館、広場、公園、新聞社、テレビ局、映画館、競技場、病院、葬儀場、神社仏閣そして路上の段ボールから高級マンションに至るまでのさまざまな住居があり、そこに無数の小さな、あるいは大きな権力を備えた「主体」が生息していながら、しかしそのどこにも「主体」はそれとしては存在していないのではないのでしょうか。

脳はわれわれの器官であり、都市はわれわれが形成したものです。にもかかわらず、われわれは都市＝脳というこの怪物的な生態系に、あたかも寄生しているかのようなのです。まちがいなくわれわれのものでありながら、しかし「生命」としてのわれわれの存在を量的にも質的にも大きく逸脱した「怪物的な超・主体」とも言うべきこの「都市＝脳」という、きわめて人間的でもあり、また非人間的でもある存在形式をどのように「正

しく」「運営する」べきなのか——そのことが、猶予のない切迫をもって、問われているのだと思います。

3. 「新しい人」のポリティクス

このような問題設定にいったいどのように答えるべきなのか。わたしに「正しい応答」がどのようなものかはっきりとわかっているわけではないのですが、「人間」の活動が生み出す効果によって「人類」の生態系全体が危機に瀕することが日々、明白になっている今日において、その「終り」から出発して、そこからの「転回」を準備することが必要であることははっきりしています。そして、ここで問題となっている危機が人類全体に、さらには地球上の他の生命にすらかかわることである以上、われわれはもはや来るべき「人類」に対して現に存在する「人類」として責任があるということになるでしょう。

この責任は全体的であり、同時に、無限です。全体とは、未来において、限りなくやってくるはずの存在のことであり、その限りない全体に対して、ほとんど無に等しい「いま、ここ、わたし」の責任が問われているのです。現にいまわれわれが生きて行っているこの呼吸がほんの微量の二酸化炭素を排出する。それは地球という巨大な生態系という次元からするとまったく無視しうる量であるように思われます。にもかかわらず、それは地球の温暖化を、環境の激変を、そして重大なカタストロフィを引き起こすとされる二酸化炭素とまったく「同じ」物質なのです。われわれはすでにこのような限りないものとしてある来るべき全体性の連関のなかに存在しています。しかもたとえわたしが懸命に二酸化炭素の排出を抑制しても、もし隣人がそれを上回る排出を行うのなら、現実的な効果としては、わたしの努力はなんにもならない。つまり主体的、倫理的な「決意」だけでは危機を回避できないのです。すなわち、「わたしの倫理」ではなく、あくまでも「人類」の現実的なポリティクスこそが問題なのです。

倫理は、それが「理性」という名の能力によるのであれ、「良心」と呼

ばれる契機によるのであれ、あるいは「正義」という理念によるのであれ、われわれ「人間」の内在性にその根拠をもっています。それはみずからを本質的に「自由」なものと規定した自己回帰的な内在性がその「自由」と引き換えに引き受けなければならない責任でした。それが近代的な理性のひとつの限界線を画していました。しかし——もちろん多少、カリカチュア化して語っているわけですが——われわれの内在性の深遠な深さをどのように探索しても、おそらく二酸化炭素を排出してはならない、という定言命題は見出されないでしょう。「事態」はむしろあきれかえるくらいに、ばかばかしく滑稽なまでに凡庸です。世界とわたしは、わたしの内在性の深みにおいてではなく、二酸化炭素というどこにもある、ありふれた、いかなる人間的な特性もないものにおいて、つながっているのです。とすれば、もはやここではわれわれは単に倫理的である、という——内在性にとっての、最終の、ともいうべき、ほとんどマゾヒズム的な「受苦」、「他者」を耐えるという究極的な「快」——だけでは、十分ではないということになります。

もちろん、すぐにも付け加えておかなければなりません、このように言うことは、倫理という究極の次元が無意味になったというわけではありません。そうではない。むしろそれはますます重要です。しかし「事態」はすでに、われわれの「深遠な」内在性の底なき底、その限界を突き破ってしまっていて、そのあるべきはずではなかった限界の向こう側に、ただどこまでも凡庸で散文的な、見慣れた世界の光景が拡がっていたということなのです。問題は、たとえば二酸化炭素の排出をどのように規制する技術的な可能性、そしてそれを実効あるものとするどのようなポリティックスを打ち立てることができるかどうか、にかかっています。それは現実的かつ実証的な問題なのです。だからこそ、この実践の局面においては哲学そして「人間」の思考はほとんど無効です。

だが、そうでしょうか。ここで明らかになっている「事態」は、ごく単純に、われわれはすでに、否応なく、「共生」的なひとつの生態系のなかに存在している、ということです。われわれはすでに、——たとえ二酸化炭素という物質の水準においでだけにしても——すでに「共生」している

のです。「人類」として「共生」し、かつ「人類」として他の生物種たちと「共生」しているのです。しかも、われわれは、未来においてやって来るすべての「人類」と他の種と、すでにして「共生」しているのです。

これは形而上学的な、神秘的な「真理」というよりは、凡庸で散文的な「事実」です。だが、われわれの内在性はこの「事実」にまだ追いついていない。われわれはまだみずから「人類=存在」として「実在」していない。「人類」はまだ「唯名」にとどまっている。とすれば、われわれはおそらく、いま、内在性の誘惑を超えて、ということはひょっとすると「哲学」の誘惑を振り切つてすら、「人類」として「実在」しようとしなければならぬのかもしれないかもしれません。すなわち、「新しい人」が生まれることを、いま、われわれは想像しなければならないのかもしれないかもしれません。



佐藤将之(台湾大学)・小林康夫・林義正(台湾大学)

2009年3月28日・台湾大学哲学系館

国際シンポジウム「東西哲学の伝統における「共生哲学」構築の試み」